

# 麻田藩陣屋跡

あだばらんやあと



麻田藩陣屋跡は、豊中市蛍池中町にあり、大阪モノレール・阪急宝塚線蛍池駅のすぐ西側に位置します。

ここに蛍池駅西地区第一種市街地再開発事業が計画され、これに伴う発掘調査を平成11年11月よりおこなっています。

麻田藩は、藩祖青木一重にはじまり、外様ながら14代にわたり幕末までつづいた約1万石の藩です。陣屋は初代一重が、大阪夏の陣（1615年）以降つくりはじめ、17世紀半ばに整えられました。明治4（1871）年の廃藩置県により麻田藩は消滅し、陣屋内はいったん田や畑になりますが、陣屋の地割りは基本的に現在までつづいています。

今回の調査地は、陣屋絵図をみると、東側に並ぶ重臣の屋敷にあたります。さらに下層では、隣接する蛍池東遺跡や蛍池遺跡からつづく古墳時代～奈良時代遺構がみつかりました。

麻田藩陣屋絵図（豊中市教育委員会所蔵）



①溝 100 石組みをもつT字形の溝です。底が屋敷前の道にむかって低くなっており、屋敷内から外への排水溝とみられます。



②井戸 13 石組みがめぐる円形の井戸です。建物の裏手に位置します。



③土坑 417 丹波焼の甕の底にアカガイが伏せられた状態で見つかりました。底には円形の穴があけられています。

④落ち込み群 短かい間につぎつぎと掘られては埋められたようです。落ち込みは北から2邸目の屋敷地に広がり、陣屋がなくなった明治時代のはじめ頃、この土地の持ち主が粘土をとるために掘ったものと考えられます。



⑤土坑 656 土師器の皿が2枚重ねになったものと他に4枚の土師器の皿がならんで出土しました。青木別邸の門にあたるところでみつかり、地しずめをしたあとかもしれません。



⑥土坑 659 播鉢の底に円形の穴があけられています。

# 江戸時代



⑦溝10 (屋敷境溝) 溝の端は深くなり、三角形に組んだ丸太材がみつかりました。貯水池と考えられます。



⑧溝12 (屋敷境溝) 底に直径10cmの杉の丸太材が置かれます。



⑨溝211 (屋敷境溝) 溝の南側(写真左)に石列・瓦片がみられ、北側にはみられません。溝の南側は分家家老青木邸にあたります。



(屋敷境溝)  
溝221  
溝219  
溝220

◎溝221と溝219は、幅1mの空地をへだてて、ほぼ平行しています。



重臣の屋敷を区切る屋敷境溝のほか、井戸、落ち込み、土坑、埋桶などが多くみつかりました。屋敷境溝は絵図とほぼ重なります。ほかに、北側・東側の外堀の一部がみつかりました。

◀溝220の石列は、青木別邸の火の見櫓または屋敷境につくられた堀に関連するものかもしれません。



鳥伏間瓦  
洲浜紋をもつ鳥伏間瓦  
洲浜紋は麻田藩藩主青木氏の紋です。



色絵の皿  
肥前でも一流の窯の製品です。



修理された中国製の皿



「麻」の字をもつ磁器碗



青磁の花びん



土製品・面子・ままごと道具

えびすさん、天神様、相撲とり、猿、馬、牛、亀、鈴などの土製品・面子のほか鳩笛が多く出土しています。急須、搥鉢、釜などのミニチュアはままごとにつかわれたようです。



備前焼のさじ  
出土例の少ないめずらしいものです。



れんげ  
中国から長崎にもたらされたしっぽく料理の普及とともに用いられるようになりました。



割れた皿を19世紀に「焼き継ぎ」という技法で修理しています。修理するほどに貴重な皿であったようです。裏に「り子(?)」および「森」と書かれています。

麻田藩藩主青木氏の紋である洲浜紋をもつ瓦や「麻」の字をもつ磁器碗が出土し、遺物からもこの地が麻田藩陣屋跡であることが明らかになりました。陣屋がつくられたころから陣屋がなくなる明治時代のはじめごろまでの遺物が出土しており、陣屋での生活のようすがうかがえます。



金属製品  
刀の金具（切羽）、お金、きせるが出土しています。

いろいろな貝を食べていたようです。



シジミ

ハマグリ

ツメタガイ

アカガイ

サザエ

アカニシ



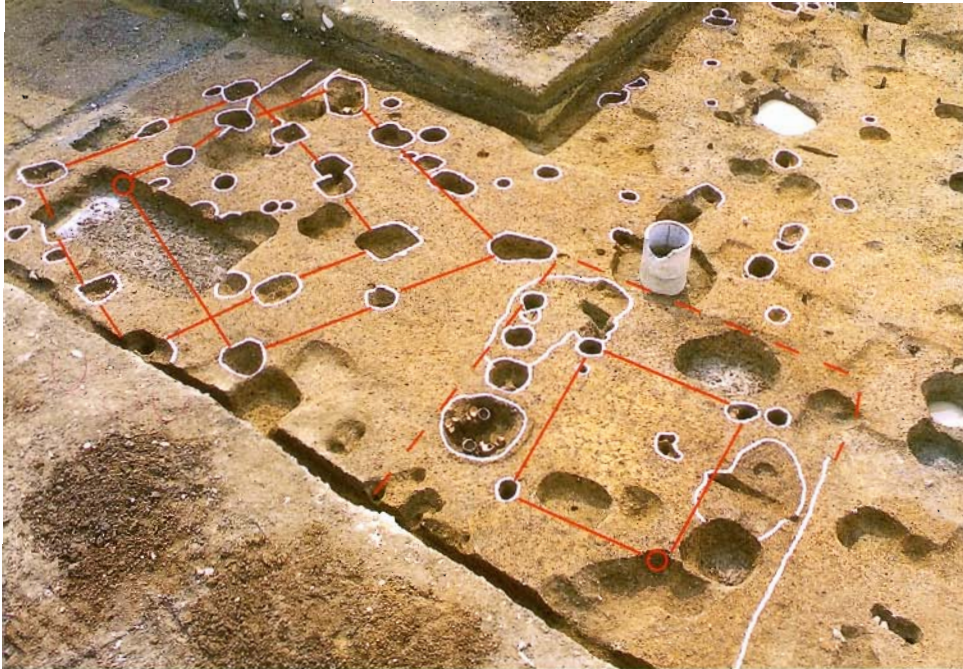
初代藩主から三代ごろ（17世紀）の陶磁器  
唐津焼の皿のほか肥前焼の花瓶や皿などが出土しています。この頃の出土遺物はあまり多くありません。



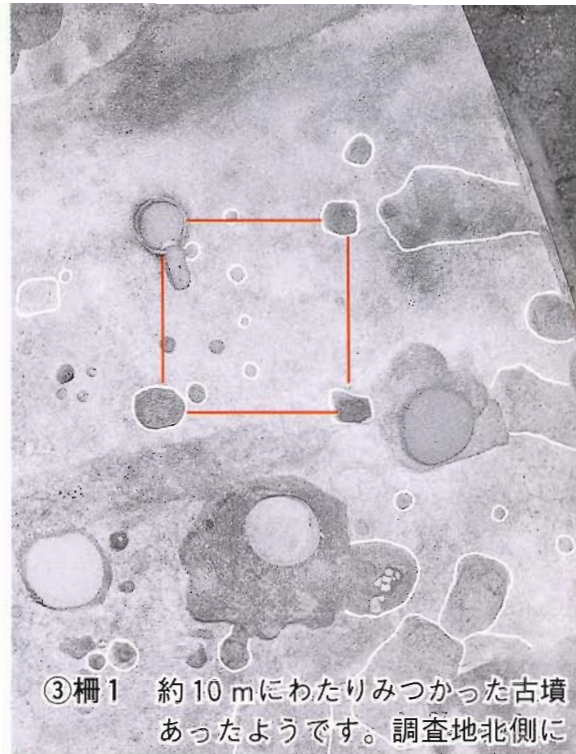
四代から十代ごろ（18世紀）の陶磁器  
肥前焼のほか丹波焼、瀬戸美濃焼などの製品があります。播鉢、花瓶、水鉢、碗、皿など多くの遺物が出土しました。



十一代から十四代および明治時代のはじめごろ（19世紀）の陶磁器  
火鉢、しびん、急須、徳利、灯明具、化粧道具、水滴などが出土しました。生活の道具がいろいろとふえたようです。



- ①建物1・2 古墳時代後期の掘立柱建物です。  
 ②<sup>たてあな</sup>竪穴住居1 4本の柱をもつ古墳時代中期はじめの住居です。



- ③柵1 約10 mにわたりみつかった古墳  
 あったようです。調査地北側に



- ②<sup>たてあな</sup>竪穴住居1 内土坑55  
<sup>はじきかめ</sup>土師器甕・高杯などがまとまって出土  
 しました。



- ⑥<sup>すえきかめ</sup>落ち込み81  
 須恵器甕・杯蓋・杯身、土師器片が出土しました。  
 須恵器甕の底の破片は、まわりが打ち欠かれており、注目されます。

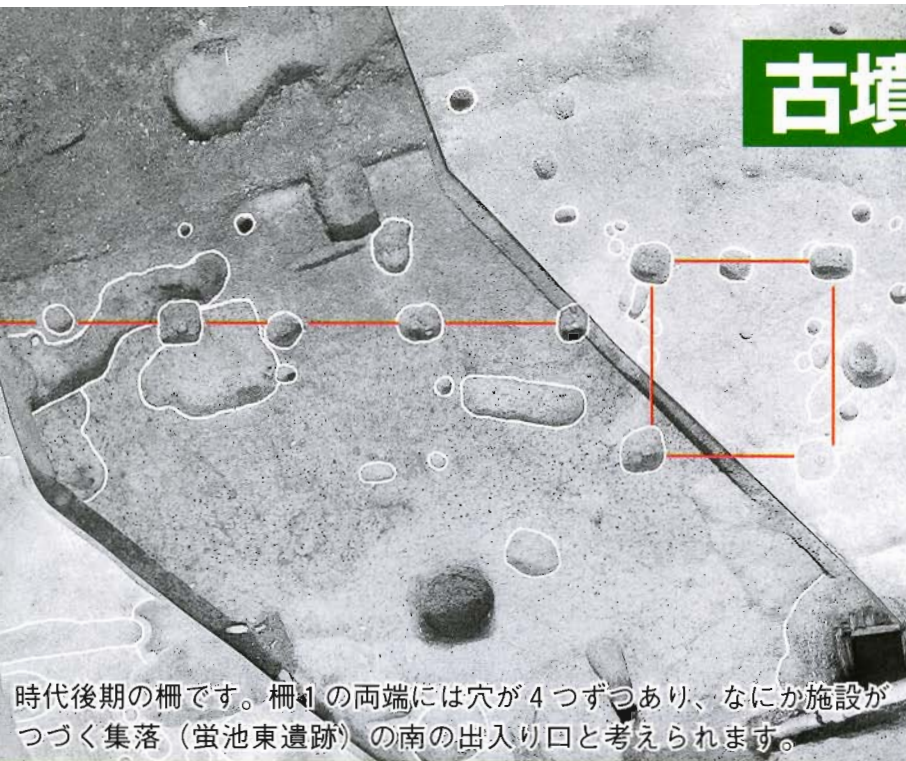


古墳時代後期～奈良時代の出土遺物



- ⑦土坑443  
<sup>ほうすいしや</sup>須恵器杯身・甕、土師器片、紡錘車とみられる土  
 製品が出土しました。

# 古墳時代～奈良時代



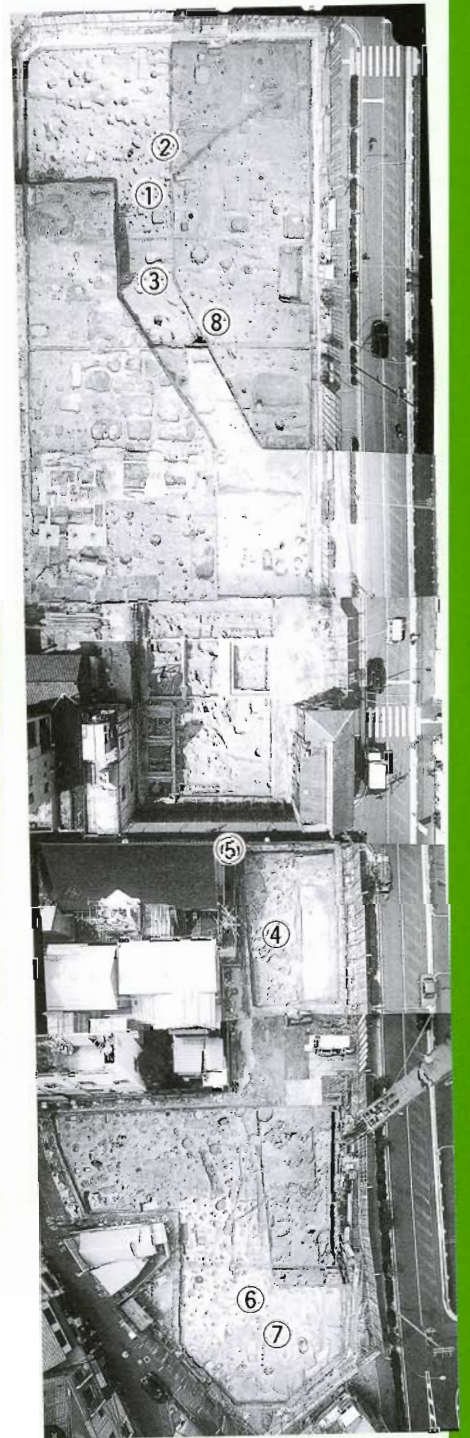
時代後期の柵です。柵①の両端には穴が4つずつあり、なにか施設がつづく集落（蛭池東遺跡）の南の出入り口と考えられます。



⑤お墓？から出土した須恵器甕



④古墳時代後期のお墓？  
楕円形の土坑が密集して見つかりました。お墓になる可能性が考えられます。



⑧井戸 7

奈良時代の井戸です。須恵器甕片、土師器皿が出土しました。

調査地北半から西端は地形がやや高く、竪穴住居、建物、柵など、北側の蛭池東遺跡からつづく古墳時代中期～後期（5～6世紀）の集落がみつかりました。なかでも柵1は集落の南の出入口として重要です。

調査地南半から東端は浅い谷がはいり、古墳時代後期（6世紀）のお墓？が密集しています。南側の蛭池遺跡からつづくものです。

また、奈良時代の井戸をはじめ、土器がまとまってみつかりました。

